



羅針盤



倉田 麻衣子

Maiko Kurata

杏林大学医学部皮膚科学教室 講師

一人医長の経験から得た「皮膚科医と看護師の連携の重要性」

一皮膚科医である私が、今回 ViD の企画を担当させていただくことになった。自分の皮膚科医としての十数年を改めて振り返ってみると、皮膚科医 8 年目で一人医長として大学の関連病院（久我山病院）に出向することになったことがターニングポイントになったと思う。

出身大学の皮膚科学教室に入局後、皮膚科医 5 年目で妊娠・出産を経て、子育てをしながら大学での仕事のペースを何とかつかみ、皮膚科医としての自信もついてきたタイミングで、一人医長として関連病院への出向を打診された。当初は一人医長という重責（皮膚科医としての仕事以上に子どもの体調不良で急に休めない）にかなり戸惑ったが、不安を抱える中、関連病院での勤務をスタートした。一人医長を経験されたことがある先生方はおわかりいただけると思うが、一人医長は非常に孤独である。多くの外来患者を限られた時間の中で診察しつつ、入院患者の処置や指示、コンサルトへの対応や各種委員会の参加など業務は意外に多いが、悩んでもすぐに相談できる上司や同僚はいない。

そんな孤独な毎日の中で心の支えになったのは、一緒に働く看護師の存在だった。大学病院の若手看護師と比べると、一般病院の看護師は大学病院から在宅医療まで看護の豊富な経験があったり、子育てしながらバリバリ夜勤で働いていたり、など人生の先輩とも言える看護師が多い。その看護師達と皮膚科診療以外にも病院のことや子育てなどの私生活について、昼休みやちょっとした時間に相談し、医師とは違った視点を逆に学ぶことができ、看護師のちょっとした気づきに助けられたことも少なくない。大学などの大きな組織では意外と接点がない WOC ナースとも一緒に褥瘡回診を行うことで、皮膚科医があまり知らない、例えば被膜剤や剥離剤、マットレ

スや体位交換などについても学ぶことができた。逆に、看護師から患者の皮膚の状態、観察のポイントや治療について質問があった際には、極力わかりやすく丁寧に答えることを意識した。看護師にとって何でも相談しやすい皮膚科医の存在は非常に重要であろうし、医師と看護師が連携をうまく取ることによって疾患に対する情報を的確に共有でき、患者の適切な治療につながるからだ。さらに、医師-看護師の連携がうまくいくことで、医師は診断や治療といった医師本来の業務に従事する時間が増え、看護師は職務満足感の向上や専門性がより高まることでキャリアパスが明確になり、看護に対するモチベーションが向上するなど効果は計り知れない。

不安の中、当初手探りで始めた一人医長生活ではあったが、医師-看護師の連携の重要性を改めて認識することができ、その後の皮膚科医としての診療スタイルの確立にも大きな影響があった。そんな関連病院の出向の経験が、WOC ナース小嶋多恵さんと責任編集を担当させていただくことにもつながっている。

今回、「皮膚科医と看護師の素朴な疑問 Q&A」として、特集を組ませていただいた。普段の何気ない皮膚科診療の中で、皮膚科医が実はよく理解できていないこと、また必ずしも皮膚に詳しくない看護師が疑問に思っているも皮膚科医に改めて質問しにくいことを意識して項目を作成した。皮膚科医-看護師のより良い連携、円滑で確かな治療の提供につながれば幸いである。

最後に、浅学菲才な私に責任編集の機会を与えてくださった編集委員長の大原國章先生、編集顧問の塩原哲夫先生、編集委員の先生方、執筆いただいた先生方に感謝申し上げます。